

# モダンの表象としての「外交官＝作家」像の 虚実

——米『ヴァニティ・フェア』誌に掲載された  
フランス人作家ポール・モランの記事をめぐって<sup>1)</sup>

吉 澤 英 樹

はじめに

フランスにおいて「外交官 diplomat」「外交（職）diplomatie」という言葉が生み出され、一つの職業的身分として確立したのは、アンシャン・レジーム末期の18世紀のことだった。それ以降、フランスの文学場では「外交官」でありながら、作家として執筆活動に身を投じた文学者が次々と登場することになる。19世紀はシャトブリアンに始まり、スタンダール、アルチュール・ド・ゴビノー、20世紀に入ると、ジャン・ジロドゥ、ポール・クローデル、ポール・モラン、サン＝ジョン・ペルス（アレクシス・レジェ）、ロマン・ガリ等々、枚挙にいとまがない。2011年には外交関連史料のアーカイヴが置かれたパリ郊外のクールヌーヴにおいてフランス外務省の肝入りで、シンポジウム「外交官作家—19世紀から21世紀にかけての実践と社会性と影響」が開かれ、19世紀より絶えず文学場に内在していた系譜を可視化させ、様々な視点からそれらの作家の集合的な営みを文学史へ取り込む作業が行われた<sup>2)</sup>。

文学場において「外交官であり作家」という特異な一つのジャンルを形成しているように見える系譜が、21世紀に入るまで包括的に検討されなかったことは意外に思えるかもしれない。しかし、それも故なきことでない。そもそも「作家」という職業自体が、近代的な印税制度が導入されることにより、その身分が確立したと言われる17世紀当初から、その経済的自立は印税収入以外にメセーンからの手当てがあって初めて

成り立つという不安定な側面を持っていた<sup>3)</sup>。19世紀以降もアンシャン・レージュム以来の文学場の伝統であるサロン文化に寄生ないしは、ブルジョワ社会のエコノミーに身を投じ、新聞の連載小説執筆や演劇脚本の上演などによって日銭を稼いでいた文学者たちは別として、代議士であったモーリス・パレスや中学校の英語教師であったマラルメの例を挙げるまでもなく、作家が他に職業を持っていることはとりたてて珍しいことではなかった。そのような中、先述のシンポジウムの発表原稿を取めた論集において、編者のロランス・バデル、ジル・フェラギュ、スタニスラス・ジャンヌソンとルノー・メルツの連名で書かれた序文によれば、この「外交家であり作家」という立場がフランスの文学場において一つの主題として初めて明確に可視化したの1925年のことだという<sup>4)</sup>。

パリ・ダダから発展する形で1924年に誕生したアンドレ・ブルトンを中心とするシュルレアリストたちが、当時駐日フランス大使であったポール・クローデル(1868-1955)に対する公開質問状の中で「フランス大使でありながら詩人であることなど、いったいどうしたらありえようか?」という表現で、「外交官」と「作家」というこの二つの身分の両立を主題化して攻撃した<sup>5)</sup>。しかしながら、クローデル自体、この若い前衛文学グループの糾弾に答えることなく、論争となることはなかったため、当の「外交官作家」がこの問題についてどのように考えていたか直接的な形で知る術はなかった。しかし一方で、当時の文学場において、「外交官」という身分を引き受け、時にはそれを明示的に利用するような形で作品を発表し、名声を得ていた作家がいた。クローデルよりも20歳年下の作家ポール・モラン(1888-1976)である。外交官として世界各地を訪れる傍で、第一次世界大戦中から戦後にかけて四冊の詩集を出版したのち、ブルーストの序文を冠した『三人女』で注目を浴びた。そして、ヨーロッパ各地の恋愛模様をモダニスト的な筆致で洒脱に描いた短編集『夜ひらく』(1922年)、『夜とぎす』(1923年)を相次いで発表し一躍ベストセラー作家となり、コスモポリタンな外交官作家としての名声を欲しいままにしていた。本稿では、この作家が1920年代当時、外交官という職業について描いたエッセーに着目し、外交官作家本人が自身の立場をどのように考えており、自らの創作活動といかなる関係を取り結ぶものと考えていたのか明らかにしたい。それによって、1925年にシュルレアリストが糾弾という形で文学場に持ち込んだこの立場の二

重性が孕む問題に内在するモダニティをまた別な形で浮かび上がらせてみたい。

## 1. 小説「中国の骨董狩り」紹介文における『ヴァニティ・フェア』誌の外交官作家像

「コスモポリタンのモダニスト」という一般的なモランに対する作家像形成には、若手のフランス外交官僚という身分や小説の内容に加え、かなり早い段階からリアルタイムでフランス以外に読者を持っていたことも少なからず寄与しているだろう。ベストセラーとなった短編集『夜ひらく』『夜とざす』は、日本でも間をおかず、すぐに堀口大學による翻訳が出版され、横光利一をはじめとした若い読者に多大な影響を与え「新感覚派」の誕生に結びついたことはよく知られている。英語圏では、限定版ながら『三人女』『夜とざす』に関しては1924年に翻訳が出版される一方で、『夜ひらく』等の初期作品の翻訳を請け負った友人のエズラ・パウンドのフランス語読解力のまずさゆえお蔵入りとなり1984年まで発表されることはなかったという事情があるものの、モランは定期的に現地の雑誌に文章を寄稿している。1923年からパウンドを引き継ぐ形でモランはシカゴのローカル誌『ダイヤル』に「パリ便り」という記事を2ヶ月ごとに寄稿し、それを1929年まで続けている。一方、1926年3月からは、これまでコレットが担当していた仕事を順次引き継ぐ形で、ニューヨークのナッシュ・コンデ社でドナルド・フリーマンが編集するファッションブルな文芸誌『ヴァニティ・フェア』へ、モランはフランス特派員として短編小説やエッセーを寄稿することになる。この『ヴァニティ・フェア』誌は、メキシコ出身のミゲル・コバルビアスやイギリス出身のアンヌ・ハリエット・フィッシュといったアールデコ風の意匠をスタイリッシュに描くイラストレーターの作品や、ハーレムの黒人文化に造詣の深いカール・ヴァン・ヴェクテンのジャズ批評を掲載するなど、ニューヨークの最新文化を体現する一方で、パウンドやオルガス・ハクスリーなどの保守的なモダニズム作家を執筆陣に抱え、当時のアメリカの社交界のニーズに答えるエスタブリッシュドな文化とハイブリッドな最先端のモダニズム文化を融合させるような試みを行っていた媒体だった。そのような中で、外交官として各国の社交界への自由

な出入りを許され、同時代の世界の諸相を洒脱に描き出すモダニストであったモランは、雑誌にとってありうべき最上の執筆者であったといえるだろう。実際に、モランの記事が最初に掲載された1926年3月号には、編集者の註とモランの肖像写真が掲載されるとともに、紹介文が添えられており、そこには以下のように書かれている。

この物語「中国の骨董狩り」は、フランス人小説家にして詩人でもあるポール・モランの作品です。これは、モラン氏が『ヴァニティ・フェア』に寄稿してくださる予定の東洋短編集シリーズの最初を飾るものです。「中国の骨董狩り」は、出来事レベルでは伝奇的なものであることに疑いはないですが、1914年の世界大戦勃発当時の北京における外交官僚たちのピトレスクなコミュニティにかんする極めて興味深い記述 (an exceedingly interesting account of the picturesque diplomatic colony) が見られることでしょう。

ポール・モラン

このページに掲載されている「中国の骨董狩り」の著者は、フランス外務省の官僚 (officially a member of the French diplomatic service) です。しかしながら、彼の声望は、主にコスモポリタンとしての、また文学者としての名声に由来するものです。彼は『夜ひらく』と、それと対になっている『夜とざす』、『ルイスとイレヌ』、そして (最新作である) 『恋のヨーロッパ』の作者でもありません<sup>6)</sup>。

この紹介文においては、「しかしながら」と一応の留保をつけるものの、これまで公刊した著書の列挙によるフランスにおける作家としての彼の活躍以上に、モランが外務省の人間であることに焦点が当てられている。そしてそのような特権的な立場にいる外国人が、彼の経験に基づいて、読者が決して目にすることのできない異国の地における外交官たちのコミュニティを描いた作品であることが殊更強調されている様子を読み取れるだろう。つまり、ここで初めて読者に紹介される作者モラン並びにその作品は「現役の外交官」という形容が宣伝文句となり、そのイメージの下に受容されるように誘導されていることがわかる。まさに

シュルレアリストが1925年にクローデルを例にとって糾弾した「外交官」でありながら「作家」という立場が、ここではそのままモラン本人とその作品を理解するためにキーワードとして、何の違和感もなく提示されているのである。「北京」というエグゾティズムを想起させる意匠と、1920年代当時において未だその傷跡を引き摺っていた近代戦争が含意するモダニティを融合させる作者の「外交官僚」という特権的な立ち位置が、上述した『ヴァニティ・フェア』誌が見据えていたモダニズムの方向性とまさに一致していたことはいうまでもない。

さて、このような編集部の紹介文が添えられた初寄稿作品の肝心の内容はどの様なものなのか。ストーリーを確認しておこう。

舞台は、1914年春の北京。主人公はイギリス人絹商人の未亡人クイーン MAB ことマリオン・アルダー・ポーモント。絹よりも細かい光沢を持つブロンドの持ち主で、北京の公使館地区の社交界の男たちを夢中にさせていたが、つれない対応で求愛を躲していた。そんな時、独身で芸術を好む若いデンマーク人オスカー・スタインが現れる。中国の地方へ発掘のためにやってきた考古学者だという彼は、ハンサムなうえ、ダンスも上手くたちまち社交界の寵児となる。中国政府の発掘許可がなかなか降りないことを理由に北京にとどまり続けるスタインはマリオンに言い寄りをはじめ。やがて第一次世界大戦が勃発し、その混乱の中、恋に墮ちたマリオンは外国人租界を離れ、骨董屋の立ち並ぶ中国人街でスタインと逢瀬を重ねる。夢のような時間もつかの間。ついに発掘許可が降り、スタインは出発しなければならなくなったという。名残を惜しみながら一ヶ月後の再会を誓い、二人は別れる。そのままスタインから何の音沙汰もなく一ヶ月が過ぎたある晩、出発するといった翌日に目的地とは逆方面へ向かう列車に乗ったスタインに会ったという話をアメリカ人の友人から聞かされる。不安に駆られたマリオンは、その後招待された協商国側の外国人たちの集うロシア公使館主催の晩餐会でベルギー大使館付の武官をはじめとした社交界の人々にスタインの消息を尋ねるが要領を得ない。従軍志願したのではないかと各国の外交官たちが話し合う中、ロシア公使は含みをもたせた笑みを浮かべている。夕食後、サロンで寛ぐ婦人たちを後にして、男たちはロシア公使の執務室に集まっていた。部屋には大きな金庫があり、公使は絹で覆われた小さな包みをそこ

から取り出した。上には紙が添えられていた。それを所有者の変遷を示す釣り書きと見た列席者たちは、大層な骨董品が包まれていることを期待する。しかし、期待を打ち消しながら、公使がそっと包みを開けると中から出てきたのはミイラ化した人間の干し首だった。先ほど話題となっていたスタインの哀れな末路だった。ロシア公使は電報を傍受して、スタインがドイツ軍の参謀将校であり、バイカル湖周辺のトンネルが続く地方でシベリア横断鉄道の爆破を画策していたことを知ったという。公使がすぐに息のかかったモンゴルのある部族の長に知らせたところ、従属の印として送られてきたのがこの品物だった。各国の外交官たちが骨董の来歴を示す釣り書きだと思ったものは手紙だった。その手紙には写真が添えられていた。そう、もちろん、マリオンの写真である。

以上がこの物語のあらすじである。各国の公使館が集まる北京の外国人租界というエグゾティックで華やかな舞台設定、そこで繰り広げられる社交界の美男美女のロマンス。ここまでは問題はない。しかし、この物語で目を引くのは、何よりも結末に挿入される逸話であろう。ロシア公使が大事そうに金庫に保管している主人公の恋人のミイラ化した干し首を、骨董品を自慢するかのように他国の外交官たちに見せるという悪趣味な設定は、当時ブルジョワ演劇の一つのジャンルとして流行していた恐怖劇グラン＝ギニョルを思わせるようないかがわしさとおどろおどろしさがある。一方で、小説中で描かれる泥濘だらけの街中で上半身裸になって汗を垂らしながらリキシャを引く弁髪姿のクーリーや路上に陣取る薄汚れたペキニーズ犬は、北京にヨーロッパの社交界をそのまま持ち込み日々の生活を送るヨーロッパ外交官たちの「ピトレスクなコミュニティ」に彩りを添えるだけの、彼らの日常とは無縁のエグゾティックな舞台装置に過ぎない。そのため、読者はこれらの描写によって意識を乱され邪魔されることなく、主人公たちのロマンスの行方に集中し続けることができる。そのような中、ヨーロッパ世界の飛び地である外部を遮断した彼らのコミュニティの只中に投げ込まれる「ミイラ化した干し首」は未開世界からやってきたペイガニズム的な異質物として読み手に落ち着かない気分を与える小道具となっており、それまでの小説の内容を忘れさせかねないほど読後に強烈な印象を残す。ただし、この不気味な逸話の挿入も、先に触れたグラン＝ギニョルが「幽霊や悪魔といった

想像上の産物ではなく、犯罪者・流れ者・異民族・伝染病と言った現実的存在」である「ブルジョワ階級の秩序と安全を脅かす危険な『他者』」<sup>7)</sup>を恐怖の源泉としつつも、フィクションを前提とすることで安心して消費が可能な商品に仕立て上げ、次々と趣向を凝らした作品を発表し成功を取っていたことを考えれば、モダンで新奇なものを求めるブルジョワ階層をターゲットとした『ヴァニティ・フェア』誌の編集方針から逸脱するものではない。しかしながら、モランの短編小説を読んだ後に、再び『ヴァニティ・フェア』誌の紹介文に視線を戻すと、あることに気づかされる。この「中国の骨董狩り」は「出来事レベルでは伝奇的(なフィクション)であることに疑いはないですが although undoubtedly legendary in incident」という断りを入れた上で、「1914年の世界大戦勃発当時の北京における外交官僚たちのピトレスクなコミュニティにかんする極めて興味深い記述」の方をこの小説において読むべきものとして読者に提示していることである。そもそも、モランが現役の外交官作家であるという紹介文は、描かれた内容の真正さを担保する機能を持っており、編集者は彼らの外交官像と実際に作家が書いた内容が一致することを何よりも求めていることは明らかである。『ヴァニティ・フェア』誌にとっては、読者の目がいってしまう「干し首」の逸話は外交官の日常生活を描き出す上の瑕疵に過ぎず、一般読者が立ち会うことのできない外交官たちを中心とした社交界の描写における真正さが何よりも重要であり、そこに「外交官作家」の職能を見出しているわけである。一方、モランは自身が現役の外交官作家として、そのおどろおどろしさゆえ明らかに自身の外交官としての経験に基づかないフィクションを導入することさえ厭わない。この小さな齟齬は重要である。というのも、例えばモランが、外交官作家にとって描き出すべきものは必ずしも自身の職業的現実の忠実な表象でなくとも良い、と考えているとすれば、『ヴァニティ・フェア』誌が正統な資格を持った話者による証言を見出す北京の外交官コミュニティの描写さえもがフィクショナルな完全なファンタジーに過ぎない可能性さえ出てくるからである。ここに両者の「外交官作家」像に対するズレが浮かび上がる<sup>8)</sup>。それでは、実際にモラン自身はどのような外交官像を持っていたのだろうか。つぎはモランの外交職に対する見解を確認してみたい。

## 2. ポール・モランとアルベール・ソレルのテキストにおける新時代の外交官像

「中国の骨董狩り」が発表されてからちょうど二年後の1928年、同じく『ヴァニティ・フェア』誌の3月号に、モランのエッセー「外交職—その古いスタイルと新しいスタイルの違い」が掲載される<sup>9)</sup>。「大使館と貴族たち (Embassies and Grands Seigneurs) は広報局と事務職員 (Publicity Bureaus and Clerks) に取って代わった」という副題が示すようにモランが奉職していたモダニズムの時代における外交官職の機能について論じたものである。

一般的に外交職は戦後まで生き延びることはできず、それを育んだ王権や君主制や絶対王政体制と共に廃れたと言われている。さまざまな国の人々が直接コミュニケーションをとるようになり、各国の指導者は秘密会談を行い、一般市民は海外旅行に出かけ、国際連盟が発足した。こういったことすべてが、外交官の威光に多大なる打撃を与えたとみなされている。新しい世代の外交官たちは、誰もがこのミイラの棺の前を通って身をさらすことを嫌がる始末である。現在では、口頭の覚書とメモランダム、協定の条文と締結された条約の微妙な区別を気にするものはなくなってしまった<sup>10)</sup>。

続いてモランは、国際政治における外交官のイニチアブの低下について、電報の発明が外交官職に与える変化を論じたアルベール・ソレルの「30年くらい前」に書かれた論文において既に予兆されていることに言及する。サンディカリズムの思想家ジョルジュ・ソレルの従兄であったアルベール・ソレル (1842-1906) は、フランスの高級官僚の頂点に位置する国務院や財務監査総局や会計検査院といった「グラン・コール」の職員や外交官を育成する政治学自由学院 (通称「シャンスポ」) の設立時に創立者のエミール・ブートミにスカウトされ、外交官房付の職員から転身し、その後同院で30年以上も教鞭を執っていた人物である。学院の外交セクションの中心人物として外交史の講義を担当し、モランが政治学自由学院において1906年より外交官へのキャリア



パスを準備している時期に同科目の教えを受けたエミール・ブルジョワと共に、多くがチャンスポの出身者で占められていた当時の外交職の官僚たちに多大な影響を与えていた<sup>11)</sup>。モランがここで言及しているアルベール・ソレルの論文は、出版年代が少し異なるものの、プロン社から1883年に出版された『歴史と批評エッセー集』に収められた「外交と進歩」を指していることは明らかである<sup>12)</sup>。

ソレルによれば、19世紀中頃に発明されたテクノロジーである電報が、2つの点において、これまでの外交のあり方を全く変えてしまったという。まずは、旧時代の外交では、各国間の交渉経過が本国に報告されるまで非常に時間がかかっていたため、交渉自体のスピードが非常に遅く、外交方策自体が熟考を重ねた上で定まっていく傾向があった。それゆえ、一時の激情に駆られても粘り強い外交努力によって武力衝突を避けることができていた。しかしながら、電報の発明により、連絡がリアルタイムで行われるようになったため、一時の感情の激昂から直ちに戦争に至るリスクが増したという。一方で二つ目の帰結として、電報に加え19世紀後半には電話という新しいテクノロジーが登場することによって、各国の施政者が交渉の席に代理人をおかずに直接やりとりができるようになったため、これまで外交官が担っていた役割が急速に奪われていったとソレルは分析している。上の引用部分において、モランはまさにこの後者の視点について指摘しているわけであるが、外交職を取り巻く状況の変化の認識について両者は一致しているものの、新時代の外交官のあり方にかんしては微妙なズレを見せる。アルベール・ソレルは、このような技術革新が、外交官から外交交渉の場における彼らのイニチアブを奪い、大臣たちの通訳者の位置にまで貶めたとするものの、新しい時代の外交官たちには、この新たな地位を利用して責任回避に終始せず、状況の変化を理解した上で新時代に適応する誇らしき人材たらんことを求めている。国家エリート育成機関のメンバーらしく、状況の変化に甘えることのないエリートの矜持に訴えかけているわけである。しかしながら、上記の『ヴァニティ・フェア』誌の記事の中でモランが提示する新時代の外交官は、そのようなエリートの矜持とは無縁で自虐に苛まれている「安月給の公務員」に過ぎない。

舞踏会だの、固まった水しぶきのように天井からぶら下がるシャン

デアアだの、サロンの喧騒だの、塔のように背の高い従僕たちだの、国家機密を手に入れるためなら喜んで誘いに乗ってくれるような魅力的な女たちだの、周りの人々の往来に落ち着かなくなった王族たちが夕食後に同盟の交渉をするために素晴らしい食事と稀少なワインによってすっかり武装を解かれた外国の外交使節を引っ張り込むための窓ぎわにある人目の届かない奥まった場所だの、そんなものはどこにあるのだろうか？〔……〕仕事は10倍に膨れ上がり、外交官たちは、自分が配属された国とはすっかり疎遠になって、不機嫌でつまらない安月給の公務員に成り下がってしまった。すでに慎ましきは外交官の美德ではなくなり、反対に新聞に対するプロパガンダだの、インタビューだの、怪しげな「公式発表」だの、ミスリーディングを誘う「通達」だのが幅を利かし、挙げ句の果てには甲高い声をあげてラジオで演説などに精を出す始末<sup>13)</sup>。

この引用部分では、モランが考える当時の外交官像をめぐって、二点のことが確認される。まず一点は、二年前に同誌で発表された小説「中国の骨董狩り」で描かれた外交官像が、ここでは明確に否定されていることである。つまり、1914年の北京を舞台とした華やかな外交官の貴族的な社交界は「完全なフィクション」とまではいえないかもしれないが、少なくともモラン自身が提示する「新しい時代の外交官」像、つまり公使館に閉じこもり、執務に明け暮れ、滞在国の文化も味わうことのできない公務員の姿とはかけ離れたものである。二点目は、ここでモランは、外交交渉の場におけるイニチアブを奪われた新しい時代の外交官の役割を大臣たちの指令の「通訳者」とみなしていたアルベール・ソレルの見立てから一歩進んで、国家の「宣伝係」という別の役割を提示している点である。この二つの点は、「外交官作家」という立場を受け入れて創作活動を行っていた当事者の職業観が直接垣間見えるゆえに重要である。つまり、「新しい時代の外交官」の仕事が国家の「宣伝」であるならば、モラン自身の作家としての活動は、エクリチュールを通じた宣伝活動として外交官の職務の延長線上にあった可能性を示唆する。またその宣伝内容が、必ずしも事実そのものを反映する必要はなく、時には「中国の骨董狩り」に垣間見られるような猟奇的なフィクションの生産さえもがその職務であったかもしれないことも意味するからである。

このような見解は荒唐無稽に見えるかもしれない。しかしあながち否定もできないのである。

### 3. 職員としての作家——海外フランス事業局（SOFE）の文化政策

政治学自由学院の外交コースに在籍したのち、外交官試験に首席合格し外務省に入省したモランは、1913年よりイギリスで公使館付きのアタッシェとして数年間ロンドンで過ごし、戦時下のパリへ戻った際に役所で紹介されて出会ったクローデルに触発され、詩作を始める。その後、モランは、ローマ、マドリッドと海外公使館を渡り歩き、1920年に設置された「海外フランス事業局（SOFE : Service des œuvres françaises à l'étranger）」に配属されることになる。

戦後の外務省内の改組によって生まれたこの部局は、「教育部門」「文学・芸術部問」「観光・スポーツ部問」「諸事業部」という4つのセクションから構成されていた。外務省にあってエコール・ノルマル出身で教授資格を持つという異色の経歴を買われ、海外のリセなどの業務に関わる「教育部門」の責任者を務めていた旧友ジャン・ジロドゥがSOFEの統括者になったこともあり、モランは1921年から24年まで「文学・芸術部問」の切り盛りを任されることになる<sup>14)</sup>。海外教育を担当していた部局と1915年に設置され戦時中のプロパガンダを担っていた情報局（Maison de la presse）が統合されたことにより生まれたSOFEは、19世紀末に設立されたアリアンス・フランセーズの活動統括を引き継ぐことによって植民地における原住民の同化政策を推進する一方で、ポール・クローデルの尽力によって1924年に設立された日仏会館のような文化交流の場や、海外フランス語教育機関であるアンスティチュ（関西日仏学院は1926年に設立された）等の海外教育文化施設の設置を積極的に進めていた。平和時の外交傾向を反映し、戦争遂行のためのプロパガンダから、地政学的観点から世界におけるフランス語・フランス文化のヘゲモニーを維持する文化政策へと活動内容をシフトさせていたわけである。

そのような中、モランが取り仕切っていたSOFEの「文学・芸術部問」は、展覧会の後援や出版物の買い取りなどによって文化資料の収集

を国内で行う一方で、ガリマール書店のアメリカ進出などを積極的に働きかけるなど、上記の政策に沿うかたちでの活動を進めていた。つまり、少なくとも SOFE に在籍していた 1921 年から 24 年にかけてモランは、まさに外務省において「国家の宣伝」をその職務としていたのである。そして、モランの作家としての名声を揺るぎなきものとした短編小説集『夜ひらく』『夜とぎす』が出版されたのは、まさにこの時期だった。詳述するまでもないが、これらはともに一人称の話者であるフランス人の「わたし」が、ヨーロッパ各地の都市で出会った人々について物語るもので、『夜ひらく』には、序文でモランと思しきが人物がピエールという男から原稿を渡され、そこに書かれた内容として六作の短編を収めている。トルコで惨めな生活を送る若いロシア亡命貴族の女性や、カタロニアの女性活動家や、北欧のヌーディストなど、戦後のヨーロッパの姿やご当地の魅力的な女性とのアヴァンチュールがモダニスト的な筆致で描かれた。いずれも、ピエールこと、話者の「わたし」は社交界人士であることは窺われるものの、どの作品においても、その身分は曖昧なままである。一方、翌年に発表された『夜とぎす』においても舞台になるのは戦後ヨーロッパの諸都市である。しかし、「わたし」の観察の対象は、各国の女性にとどまらず、アイルランド出身の老詩人やロンドンで活躍する軍医あがりのアラブ人美容整形外科医などの男性にまで広げられる。語り手についても、ニューヨークのフランス総領事館に出入りする彫刻家、アルジェリア歩兵連隊に所属していた復員兵、またある時は年老いた政府の要人と一人称の話者が明らかなフィクショナルな存在として描かれ、前作とはまた違った趣を呈する作品となっている。いずれにせよ、どちらの短編集も話者が外交官モラン本人であるという確証を読者に与える指標はない。しかし、それでも当時の読者はモラン自身の姿をそこに見ていたようだ。卑近な例として、1924 年に刊行された日本語版における堀口大學の解説に注目してみよう。

1913 年に彼は外交官試験に首席で及第した。その後彼は佛国外交官として欧州のあらゆる首都に在勤し出張した。彼の小説の舞台が北欧スカンジナビアであり、南欧スペインであり、ウィーンであり、コンスタンチノーブルであるのも実はそれが為である。彼の作品の大部分は寝台車の中で書かれた。彼は今年 36 歳だ。彼はすで

に千以上の異なる寝台にねた。〔……〕彼の外交官生活が、彼を上品な紳士に仕上げた<sup>15)</sup>。

モラン自身の序の後に、日本版の序文にあたる「譯者の言葉」で堀口は、モランが外交官であることを紹介し、それが小説の設定と密接に結びついていることを示す。そして作者の36歳という年齢と外交官生活由来の「上品な紳士」という属性を挙げながら、話者の背後にモラン自身の姿を見出すように読者を誘導しているのである。つまり、外国において刊行された彼の作品は、やはり現役のフランスの外交官によって書かれたものであり、そのイメージの下に読まれるべきものとして提示されている。堀口がこの事実を書き入れた経緯は分からないものの、これらの作品の刊行を考えていた当時、フランス外務省のSOFEの職員であったモラン自身に会っており、序と本文との間に挿入されたこの紹介文は完全な堀口の独断ともいえない。少なくとも、先に引用した『ヴァニティ・フェア』誌における紹介文と同様に、日本の読者に初めて紹介された作品において、作者が外交官であることがクローズアップされている。つまり、アメリカであれ日本であれ、フランス以外の外国でモランの作品が紹介される媒体においては、何よりも外交官という作者の職業が重要な属性として、作品内容と密接に結びつくものとして語られているのである。

フランス外務省では1901年に内部通達が発せられ、それまでシャトブリアンが行っていたような自身の著作への外交文書の引用も禁止され、外交官が本名ないしは筆名で著作を公刊する時は、あらかじめ外務省の許可を求めることが必要になったという<sup>16)</sup>。つまり、職業上の守秘義務に加え、フランス外交の方向性と合致しないものをあらかじめスクリーニングして除外する制度が存在していた。しかしながら、サント・ドミンゴの領事で外交官作家のアルベール・ベラルールが1932年に書いた小説『熱帯地方の娘たち』における描写がスキャンダルを巻き起こし、ドミニカ共和国から抗議が入り、この内部検閲制度が再検討に付されるまで、特に文学作品についてはこの原則が必ずしも遵守されていなかったことが明らかになった<sup>17)</sup>。それゆえ、モランが『夜ひらく』『夜とぞす』を刊行する際にこの内規を遵守していたかは定かではない。しかしながら、当時、外務省には外交官の著作活動に関する規制が原則

として存在していたことに加え、何よりもモラン自身が、国産の文化生産物によってフランスのヘゲモニーを宣伝する「文学・芸術セクション」の責任者として SOFE の職員であった。この事実を考えるならば、これらの作品は SOFE の活動の一環として執筆され、海外に紹介されていたとも見なさうのではないか。もっとも、SOFE の外交官の職務としての作家活動という側面を殊更強調することは、モランの作家としての文学的名声の根拠となっている作品を工作員によるプロパガンダの位置にまで貶めることである。それゆえ、事実関係に関してはモランが告白していない以上、今後その執筆動機が明らかにされることはないだろう。しかしながら、このような視点は一方で、『ヴァニティ・フェア』誌の記事に見られた作家自身による外交官像にかんするイメージ修正が、雑誌が期待していたものとの間に微妙にズレが生じさせている点を説明し、モランの 1920 年代後半の創作活動を読み解くための一つのヒントを与えてくれるように思えるのである。

### 結びにかえて

職業柄、世界各国を旅しながら、一般市民が目にすることもない異郷の地において、その身分ゆえに出入りを許された各地の社交界に集う上流階級の人々の風習を、時には彼らとのアヴァンチュールを楽しみながら、フランス人らしい知性で観察し描き出す貴族的人物。『ヴァニティ・フェア』誌や堀口大學の手による紹介文から透けて見えるフランス「外交官作家」像はこのようなものだろうか。

第三共和制に入って外交官試験が制度化され、外交職は政治学自由学院出身者を中心とした専門的事務官僚という側面が強くなる一方で、アンシャン・レジーム時から続く上流階級の子息の縁故入省の習慣も残す移行期にあったことや、モラン自身がルーマニアの貴族の娘エレヌ・クリソペローニを妻としていたことを考えるならば、上記の外交官作家像は全きフィクションというよりは、虚実の入り混じったものではあっただろう。少なくとも、海外の読み手はこのような外交官像を望み、SOFE に在籍していた当時モラン自身もそれに表立って反駁することはない。しかしながら、先に引用したモランが 1928 年に『ヴァニティ・フェア』誌で描き出した宣伝係に墮した「安月給の公務員」という外交

官像はこのようなイメージを完全に打ち消すものである。これは同時に『夜ひらく』など20年代前半に書かれた作品の背後に読者が見ていた外交官作家像を否定するという意味において、作家自身のこれまでの業績を危うくする行為でもあるだろう。なぜここまで極端な新しい時代の外交官像をモランは自虐的に提出する必要があったのだろうか。

1924年にジロドゥとともに SOFE の職務を外れたモランは破格の契約金と引き換えに、「20世紀時評」というテーマでそれぞれの大陸を舞台とした4冊の短編小説集を出版する専属契約をグラッセ社と結ぶことになる<sup>18)</sup>。同社からは、フランス人銀行家とギリシア人銀行家女性の結婚生活を描いた長編小説『ルイスとイレヌ』を出版した後、叢書「20世紀時評」の一巻として短編小説集『ヨーロッパの恋』を上梓した1925年にバンコクのフランス公使館への派遣の誘いに乗り、6月27日にシェルブールを出港する。そして、ニューヨーク、ヴァンクーヴァーを経由して、クローデルのいる日本、そして北京へと寄港し、9月によりやくバンコクに入り、そこで二巻目である『生ける仏陀』を執筆し始める。しかし、10月末に赤痢に罹患し、サイゴンで緊急入院した後、フランスへ送還されることになる。帰国後一等書記官に昇進し、1926年には外務省に便宜を図ってもらい、執筆を続けながらベルギーやオランダを訪問している。研究書によってその開始時期にばらつきがあるものの<sup>19)</sup>、この外遊を繰り返していた期間にモランは外務省へ休職願を出し、1938年に外交職に復帰するまで作家活動に専念することになったようだ。大臣官房への出向や代議士としての活動が、エリート官僚の一つの出世ルートになっているフランスにおいて、公務員の兼業は禁止されておらず、彼らの休職も即ち離職を意味するものではなかった。それゆえ、結局は外交職に復帰するモランの休職にどれほどの覚悟があったか推察することは難しい。就職後も駆け出しの外交官だったときは毎月両親から仕送りを受け<sup>20)</sup>、ベストセラー作家となって1924年にグラッセ社から大金を手にし、1927年1月にエレヌと結婚したモランは作家としてのキャリアを進めるにあたって金銭的な不安はなかった。実際、後年のインタビューにおいて、モランは「金に不自由しなくなったら、さっさと外務省の仕事は投げ出してしまった」と語ってはいる<sup>21)</sup>。しかしながら、モランの休職にはそれ以上の意味があったことは間違いない。「四人組」の異名をとる当時フランスの外務省が抱えていた「外交官作

家」、つまりクローデル、ジロドゥ、サン＝ジョン・ペルス、モランの中で、モラン以外の三人は入省前にすでに作家として作品を公刊していた。要するに、彼らは外交官である前にすでに文学者だった。それに対して、モランだけが外交官としてのキャリアを歩み始めてから著作を執筆し始めた作家だった。この差は決して無視できないだろう。それに加え、モランは SOFE の職員であった時期に文学者としての名声を手にした作家でもあった。つまり、彼以外の三人が外交官の職を持つ「真の作家」であるのに対し、彼自身は作家を職務とする外交事務員に過ぎないとみなされる可能性があった。それゆえ、外国の雑誌である『ヴァニティ・フェア』誌上で、これまでの作品の虚構性を晒した上で、彼は現役の外交官時代に手にした武器を携え、しがらみのない作家として新たな目で今一度目の前に広がる同時代の世界のモダニティを捉えなおそうとしたのではないか。この記事が発表された三ヶ月後の6月、彼は満を持してグラッセ社のカイエ・ヴェール叢書から「20世紀時評」シリーズ第三段作品である『黒い魔術』を上梓することになる。カリブ海、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカと世界に拡散した20世紀初頭の黒人世界に見られるモダニティを間大陸の視点から縦横無尽に描きだしたこの作品において、モランは作家として確かな手応えを得ていたのだろう。

このように考えると、1925年にシュルレアリストたちがクローデルに放った批判は、少なくともモランにとってはあながち的外れなものではなかったのかもしれない。「外交官でありながら作家でなどいられるものだろうか？」そう考えたモランは外交官という立場をいったん外すことで初めて自身の作家という職業が自分のものであることを確信したのではないか。自由になった作家によるこの時期の作品についてはまた稿を改めて論じたい。

## 注

- 1) 本稿は平成28年度科研費助成事業「モダニズムの思想圏における保守的文化相対主義の位相—ゴビノーからマルローまで」(挑戦的萌芽研究: 研究課題番号16K13161)の研究成果発表の一環として執筆された。
- 2) Laurence Badel, Gilles Ferragu, Stanislas Jeannesson et Renaud Meltz (dir.), *Écrivains et diplomates: L'invention d'une tradition XIX<sup>e</sup>-XXI<sup>e</sup> siècles*, Armand Colin, 2012.
- 3) アラン・ヴィアラ『作家の誕生』塩川徹也監訳、藤原書店、2005年、



142-145 頁。

- 4) Laurence Badel, Gilles Ferragu, Stanislas Jeannesson et Renaud Meltz, « Introduction », in *Écrivains et diplomates: L'invention d'une tradition XIX<sup>e</sup>-XXI<sup>e</sup> siècles*, *op. cit.*, p.21.
- 5) « Lettre ouverte à M. Paul Claudel : Ambassadeur de France au Japon » in, *Tracts surréalistes et déclarations collectives*, présenté et commenté par José Pierre, t.1, *Le terrain vague*, 1980, pp.49-50 et 392. 1925年7月1日付のこの公開書簡は、同年6月24日『コメディヤ』紙に掲載されたインタビュー記事のなかで、クローデルがダダイズムとシュルレアリスムを「男性的」と扱き下ろし、それを自身の「作家、外交官、フランス大使、詩人」としての見解であると発言したことへ反発するシュルレアリストとダダイストからの返答である。
- 6) “Editor’s Note” in Paul Morand, “A Chinese Curio Hunt; An Incident, Vividly Dramatic, of Life in the Foreign Colony of Pekin”, *Vanity Fair*, New York, March 1926, p.44.
- 7) 真野倫平「グラン＝ギニョル劇と精神医学の諸問題—アンドレ・ド・ロルドの作品における精神病者像」真野倫平編『近代科学と芸術創造—19～20世紀ヨーロッパにおける科学と文学の関係』行路社、2015年、189頁。奇しくもモランとグラン＝ギニョルの代表的な劇作家アンドレ・ド・ロルドは、アフリカ黒人由来の呪術をモチーフとした「黒（い）魔術 *Magie noire*」という同名の作品を、それぞれ1928年（モラン）と1933年（ド・ロルド）に発表している。
- 8) 伝記的事実を見るならば、モランが初めて中国を訪れたのは1925年であり、少なくとも大戦前夜の北京の外国人租界における社交界の描写は彼の経験をそのまま描き出したものではない。
- 9) Paul Morand “Diplomacy, Old and New Style: Showing That Embassies and Grands Seigneurs have given way to Publicity Bureaus and Clerks” in *Vanity Fair*, March 1928, New York, p.40 and p.104.
- 10) *Ibid.*
- 11) Pierre Rain, *L'École libre des sciences politiques, 1871-1945*, Fondation Nationale des Sciences Politiques, Paris, 1963, pp.40-43.
- 12) Albert Sorrel, « La diplomatie et le progrès », in *Essais d'histoire et de critique*, Plon, 1883, pp.281-293.
- 13) Paul Morand “Diplomacy, Old and New Style”, *op. cit.*
- 14) Michel Collomb, *Paul Morand: Petits certificats de vie*, Hermann, 2007, p.25; Stanislas Jeannesson, « Les écrivains diplomates acteurs ou instruments d'une diplomatie culturelle?: Le cas du Quai d'Orsay au premier XX<sup>e</sup> siècle », in *Écrivains et diplomates: L'invention d'une tradition*

*XIX<sup>e</sup>-XXI<sup>e</sup> siècles, op. cit.*, pp.58-59. なお、本稿における SOFE の活動についての記述は上記の著作に拠っている。

- 15) 堀口大學「夜ひらく―譯者の言葉」、『堀口大學全集』補巻1、小澤書店、1984年、218-219頁。なお、引用にあたっては大部分の旧字体を新字体に改めた。
- 16) Stanislas Jeanneson, « Les écrivains diplomates acteurs ou instruments d'une diplomatie culturelle?: Le cas du Quai d'Orsay au premier XX<sup>e</sup> siècle », in *Écrivains et diplomates, op. cit.*, pp.63-64.
- 17) Renaud Meltz, « Âge d'or ou naissance d'une tradition?: Les écrivains diplomates français dans l'entre-deux-guerres », in *Écrivains et diplomates, op. cit.*, pp.81-82.
- 18) Michel Collomb, Paul Morand, *op. cit.*, p.60.
- 19) ミシェル・コロンプは1926年の3月 (*ibid.*, p.26)、ドミニク・ラニは1927年3月 (Dominique Lanni, *Paul Morand: explorateur des mondes noirs*, Presses de l'université Paris-Sorbonne, 2014, p.132) スタニスラス・ジャソンは1925年 (Stanislas Jeanneson, *op. cit.*, p.60) としている。
- 20) Michel Collomb, *op. cit.*, p.20.
- 21) Ginette Guitard-Auviste, *Paul Morand (1888-1976), légende et vérités*, Balland, 1994, p.42.